In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	Noli Me Tangere
Author	益田, 道三
Citation	人文研究. 7 巻 4 号, p.333-347.
Issue Date	1956
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学会
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

Noli Me Tangere

益田道三

D・H・ロレンスについては、既に『人文研究』第二巻第二号に、「D・H・ロレンスの太陽生活」を、同じく第七号に「肉体の復活」を、更に第六巻第八号には、「Human Being と Social Being」を取り上げて、ロレンスの哲学の三つの面を説明した訳であるが、今回はこの哲学の別の面に触れて見たいと思う。それは彼の言葉によると、本稿の題目に使つた *Noli Me Tangere* の中に包含されている idea に関連のある事柄である。元来、ロレンスの哲学、というより寧ろ Lawrentian (Lawrencian と綴つている writer もある) Philosophy という方が、ぴつたりするのだが、これは D.H. Lawrence (一八八五—一九三〇) という一つの人格が、生れ生き死ぬ間に、その処女作『白孔雀』(*The White Peacock*) 以降彼の著作物が、その自伝的な部分で語つているような特異な生活環境の中にあつて、形成して行つた彼の哲学には、その中に多くの矛盾を包蔵しているだけ、一見複雑な様相を呈している。しかしそれは一個の人格が、生活の途上で、触手をのばしてかき集め、それを意識の中でこねまぜて、彼独特の個性的な着色を施した生産物であるに過ぎない。而もそれを外部から観る場合には、観察者の眼の位置に従つて、その呈する面が異るということになる。そういう面の一つに、*Noli Me Tangere* を以つて銘名しているのがあつて、筆者は今それに光をあてて見ようと思い立つたのである。

ロレンスの哲学を探索する時に、第一に手がける詩集『パンジイズ』(*Pansies*) を開けて見ると、*Noli Me Tangere*

と題する詩があつて、その第一行目に Noli me tangere, touch me not! とあつて、題目の説明を加えている。そして、この詩の前には、*Touch* と題する詩が出ていて、同じ問題を取扱つている。ロレンスが、この問題について、如何に深い関心を寄せているかが覗い知られる。今、便宜上、*Touch* を引用してお目に掛けたい——

Since we have become so *celebral*
we can't bear to touch or be touched.

Since we are so *cerebral*
we are humanly ont of touch.

And so we must remain.
For if, *cerebrally*, we force ourselves into touch, into contact physical and fleshly,
we violate ourselves,
we become vicious.　　(Italics mine.)

この詩に於いては、勿論「接触」(touch, contact) を取扱つているのであるが、それは言わば、表面にあらわれた行動であつて、その背後にある条件に従つて、それがロレンスの心にかなつた「接触」であつたり、なかつたりする。だから「接触」それ自身は、ロレンス哲学の本質を形成するのではない。今右にのべた条件が「接触」の価値を決定する。然らば、その条件とは何か？　上掲の詩に現われたところでは、第三聯の三行目にある physical と fleshly という二語であらわされている。そしてそれに対抗する条件或は非条件としては、第一聯及び第二聯の一行目にある cerebral と、第三聯の二行目にある cerebrally という語である。これら二つの語は、いうまでもなく、cerebrum という語の形容詞又は副詞形であつて、ロレンスは、人生万事「頭脳」をもつて対処したり、所理することをねがわしくないとするのであ

る。そしていつも「頭脳」という語をもつて一貫するのでなく、他の語で同じ意味をあらわしていることがある。mind, mental, idea, spirit 及びこれらとの合成語である。そしてこれらは、勿論 body, flesh と相対峙している。この肉体と頭脳（又は心）とは、互に anthithesis の関係にある、というロレンスの考え方を、最も手取り早く知ろうと思えば、長論文であるが、Introduction To These Paintings' を読むに限る。これは『不死鳥』(*Phoenix*) と題するこの作家の拾遺文集——といつた種類の著作物の中に收められている。『不死鳥』の 'Appendix' に依ると、ロレンスは一九二九年にロンドンの Mandrake Press から、*The Paintings of D. H. Lawrence* という画集を出版し、前出の 'Introduction To These Paintings' は、この本の序文であつて、作家でもあり画家でもあるロレンスのセザンヌ論とも云い得る文章で、彼特有の性の哲学から、ギリシャ劇、沙翁劇、エリザベス女王時代や復古王朝時代の才人たちを批評している、本論としては近代画家として、彼がセザンヌを唯一のすぐれた画家と見做す理由を述べている。而して彼の議論の根底をなす考え方は、spiritual-mental consciousness と instinctive-intuitive conciousness とを対立させ、近代生活は、後者の犠牲に於いて、前者が発達してくるので、それを遺憾とし、この形勢を是正しなければならないと絶叫するのである。人間が意識を持つに至るのは、霊的、精神的な過程によるのと、肉体的過程によるのと、二つの方法又は方向に分れるが、ロレンス哲学は、いうまでもなく、後者を採用せよと指示する。『不死鳥』に於いて「これらの絵に対する序論」の次に出てくるのは、'Education of the People' という四十九頁に亘る教育論であるが、ここでも幼児教育に当つて、母親の知識によつて知慧をつける教育をやめて、肉体を動かしめる指導によつて本能による意識が発達するように持つてゆくべきであるという。

In the early years a child's education should be entirely non-mental. Instead of trying to attract an infant's attention, trying to arouse its *notice*, to make it *perceive*, the mother or nurse should mind-

lessly put it into contact with the physical universe. (*Phoenix*, p. 641.)

この引用文中で、non-mental とか mindlessly という言葉に特に強調を置く必要がある。幼児が外界を意識するに当つて、少しも mind の指図を受けていない。それで、ロレンスは、幼児の子守をするのに、無教育な百姓女の方が、意識過剰の母親よりも適当であるという。それは百姓女の方が、子供に対する時、その態度に観念的なものをさしはさまないからである。彼女は動作を示して、それによつて子供がその動作をするように仕向け、言葉を使わない。そうして子供が仕出す動作は、mindless motion である。動作によつて教えよというロレンスは、若い頃小学教師をした経験があつて、小学校に於ける手工教育を重視している。それは手工によつてこそ動作による教育が出来るからである。手を使つて仕事をする場合には、

The fingers must almost live and think by themselves. It is no good working from the idea, from the fancy : the creation must evolve itself from the vital activity of the fingers. (*Phoenix*, p. 653.)

といつたことが実現されて行くので、その結果体得されるのは、direct knowing by contact であつて、understanding と云つた mental work ではない。

さて、前に持出した「これらの絵に対する序論」では、セザンヌが絵をかく時の構想に於いて、mental concept の圧政に四十年もの間、それから脱却しようとして苦しんだが、林檎の絵をかいた頃から、彼は過去のあやまつた芸術的意識から更生することが出来たというので、ロレンスは彼に敬意を表しているのである。この意味のことを、ロレンスはこういう風に説明している——

The man of flesh has been slowly destroyed through centuries, to give place to the man of spirit, the mental man, the ego, the self-conscious I. And in his artistic soul Cézanne knew it, and *wanted to rise in the flesh*. He could not do it, and it embittered him. Yet, with his apple, *he did show the stone*

from the door of the tomb. (Italics mine.) (*Ibid.*, p. 568.)

かくて、mind や spirit を仲介とせずに、Knowledge by contact をもつて本当の意識に到達する道と考えるロレンスは、そのcontact が'immediate sensual contact' (*Ibid.*, p. 653.) であるべきことはいうまでもない。(前掲 *Touch* という詩を参照) ところで、今引用した文の中で、イタリックの部分は、勿論新約聖書ヨハネ伝二十章一節から十八節までのイエス復活の記事と関係があるのである。

イエスが所刑された次の日は安息日、その翌日、即ち「一週(ひとまわり)のはじめの日、朝まだき暗きうちに、マグダラのマリヤ墓にきたりて、墓より石の取除(とりの)けあるを見る。」という訳で、彼女は誰かが主の死体を持ち去つて行つたと思つて、ペテロと「イエスの愛し給いしかの弟子」に、急を告げた。そこでペテロと「かの弟子」とは墓へかけつけた。「かの弟子」の方がさきに到着したが、墓の中に入らない。ペテロが後れてやつて来て墓に入つて見ると、死体を巻いてあつた布はあつたが、首を包んであつた手拭は、布と一緒ではなく、別のところに巻いて、おいてあつた。先着の「かの弟子」も入つて、これを見て信じた。マグダラのマリヤは墓の入口に立つて、泣いていたが、ふと墓の中を見ると、イエスの死体の頭のあつた場所と足のあつた場所に、白衣の天使が坐つていた。天使が彼女に泣いている訳をきくと、彼女は誰かが主を持ち去つたが、そのありかが分らないからと答えて、振り返ると、イエスが立つているのだが、それがイエスであることを知らない。彼女はこれを園守だと思つて、主の死体のありかを尋ねる。すると、イエスが、「マリヤよ」と声をかけたので、彼女もイエスであることが分つて、「ラボニ」(師よ) と呼んだ。イエスは、マリヤに触(さわ)られない前に、先手を打つて、「われに触るな、我いまだ父の許に昇らぬ故なり」と云つて、「わしはこれからわが父、すなわち汝らの父、わが神、すなわち汝らの神の許にゆく」から、その旨をわが兄弟たちに知らせに行くように命ずるのである。

以上が聖書の伝えるイエスの復活であるが、イエスが夜のうちにいきを吹きかえし、自分でその身体を包む布や頭にまいてある手拭を取り除き、墓を閉じている重い石をころがして外へ出たことはのべてない。西洋古典劇のテクニークのよ

うに "off stage" の出来事として報告されているに過ぎない。そして復活したイエスを最初に見るのは、マグダラのマリヤだが、それは聖霊の姿をとつたイエスで、肉体の復活でないから、幻のような姿を見てイエスとは感づかず、園守だと思い、イエスの死体のありかを尋ねる。そこで「マリヤ」と呼びかけられて初めて「ラボニ」であることをさとる。ロレンスは、このような霊の復活には満足出来ず、イエスは実際自分の手で墓石をころがし、白衣をつけたまま外に出たという風に解釈している。そしてエルサレムより反対の方向に道をとつて歩いてゆく時、逃げた鶏を捕える手助けをしたのが機縁となつて、持主である百姓の家にかくまわれて、傷が癒える迄置いてもらう。それからこの男の行末を取扱つたのが、初め「逃げた鶏」と名づけ、後に「死んだ男」と改題した中篇小説である。それはそれとして、セザンヌが林檎の絵をかいた時から、彼が新らしい画の認識に目ざめたことを、'yet, with his apple, he did shove the stone from the door of the tomb.' と云つたのは、「死んだ男」によつて、作者がとつたイエスの復活の新解釈によるところの「自ら岩をころがして外へ出たイエス」に擬しているのである。

それから、マグダラのマリヤが、イエスの姿を認めて「ラボニ」と呼んだことは、前に触れたが、イエスはマリヤに触られると困るためか、すぐ追つかぶせて、「われに触るな、我いまだ父の許に昇らぬ故なり」と、予防線を張つている。これはキリスト教神学でどういう解釈をつけるのか知らないが、イエスは復活したばかりで、マリヤというようなこの世に在る肉体を持てる人間に触られるのは順序でなく、先ず天にいます父なる神の許に行つて、復活を確認してもらう必要があつたのである。そのためのイエスの言葉「われに触るな」、これは英訳聖書では、'Touch me not.' となつているし、拉丁語では 'Noli me tangere.' となるのである。

イエスの復活は、霊による復活であるため、彼がマリヤに復活の姿をあらわした時、彼女に向つて「われに触るな」と云つて彼に触ることを、先廻りして禁止した。このことに対するロレンスの批判は、「死んだ男」(The Man Who Died) がその一つであり、「喜べる亡霊」(Glad Ghosts) がその二である。「死んだ男」は、異教の神 Isis に仕える priestess

と触れ合うことによつて、彼の肉体、即ち生命がいやされる（is made whole）ことを取扱つているが、これは既に本誌第二巻第七号「肉体の復活」に於いて、多少詳細に論じたから、只今は「喜べる亡霊」にあらわれた触れ合い（touch, contact）や、死体（corpse）対生命体（flesh and blood）の問題を考えて見ようと思う。

「喜べる亡霊」、これは一人称で書かれているが、「私」（即ちマーク・モリアー Mark Morier）の外、五人の人物で出来ている。その中の一人ラスキル卿（Lord Lathkill）が撫然として語る言葉に次のようなのがある——

Think how ghastly for Jesus, when he was risen and wasn't touchable! How very awful, to have to say *Noli me tangere*! Ah, touch me, touch me *alive*!

イエスが復活してマリヤに姿をあらわした時、「わしに触るな」といわれなければならなかつたとは、何といやなことであつたろうというのである。即ち、イエスの復活は、霊の復活（resurrection of the spirit）であつたから、「わしに触るな」と云つて、逃げなければならなかつた。若しイエスが、肉体の復活を獲得していたならば、「わしのからだのどこでも触つてくれ、この通り活ける肉体なのだ」と云つて、堂々と触らせる自信があるのである。——と、ロレンス哲学は考える。

これに対するイエスの見解は、ヨハネ伝の第三章の第一節から第二十一節までの箇処に見ることが出来る。ここではイエスとニコデモとの間の宗教問答が記されていて、イエスは、人は生れかわらなければ、神の国に入ることが出来ぬと説く。而もこの甦生は、水と霊とによるのであつて、「肉によりて生るる者は肉なり、霊によりて生るる者は霊なり。なんぢら新に生るべしと我が汝に言いしを怪しむな」と教えているが、「なんぢら新に生るべし」という聖句を利用（或は逆用）して、「妾は肉体の復活を信じます」というのが、チャタレイ夫人である。この霊と肉体の対立は、見解の相異で、両者を調整するの道はない。その理由は、一つには、両者を生み出した時代的背景の相異による。イエスの時代には、宗教的改革を行うには、イエスを要したのであり、「現代の文明が崩壊しようとしている」と鑑定するのは、「チャタレイ

夫人の恋人」の作者であり、それは「吾々は本当の男性ではなく、また女性も本当の女性ではない。吾々の頭を働かるせ「間に合せ者」、器械的な知性的な「実験物」である」と、同じ作の一人物が云つている。それで頭脳の生産物である器械による生活をやめて、肉体の復活を計れ、つまり汽車などの乗物によらないで、歩行で済ませよ、という訳である。で、「喜べる亡霊」では、ロレンスのこう云つた考え方がどんな風に表象されているか。

第一に題目に使われている「亡霊」（ghosts）とは、何を意味するか。それは前掲の「これ等の絵に対する序論」に詳細に説明されているけれども、要するに、吾々はみんな亡霊として生れ、亡霊の生活を送つている。ここで同じ意味のことを、spectre とか shadow とか云つた語をもつて云いあらわしている。

And by shadow I mean idea, concept, the abstracted reality, the ego. We are not solid. We don't live in the flesh. Our instincts and intuitions are dead, we live wound round with winding-sheet of abstraction. And the touch of anything solid hurts us. For our instincts and intuitions, which are our feelers of touch and knowing through touch, they are dead, amputated. (*Phoenix*, p. 570.)

この引用文によつて、亡霊の生活と肉体の生活が、如何なる意味を持つかが分るであろう。亡霊の生活は、実体のない抽象の生活であり、肉体の生活は、本能や直覚によつて知覚又は意識に達することが出来、接触（touch, contact）は、これによつてのみ可能で、idea とか concept に依存する抽象の生活に於いては、接触はあり得ない。こうした考え方は作者ロレンスが、第一次世界大戦後の欧州人を観て得た人間観である。

「喜ばしき亡霊」に出てくる人物は、みな亡霊の生活を送つている者ばかりで、その中で二人だけが例外である。それは、この物語を語る「私」（その名はMark Morier）とその友 Carlotta Fell とである。二人はロンドンの The Thwaite といる画熟で相知る。この女画学生は Honorable という称号をつけて呼ばなければならないお姫様で、男は素寒貧の平民である。彼女は静物画ではいつも優秀賞を獲得し、画熟の女王（Playing bird of paradise among the pigeons）

として振舞う。二人は、そういう階級の障害を蹴飛ばして ‚friends' （原文に従う）と呼ばるべき友交関係に入つた。その依つて立つよりどころは、

She and I had a curious understanding in common : an inkling, perhaps, of the unborn body of life hidden within the body of this half-death which we call life ; and hence a tacit hostility to the commonplace world, its inert laws.

The Woman Who Rode Away (Albatross Library), p. 201.

というにある。これに依ると、Carlotta も Mark Morier も、全然肉体を喪失して了つている訳ではない。その同じ意味のことを、男は自分について、the half-dead body of this life だとか the quick body within the dead (*ibid.*, p. 201.) とかいう云い廻しを使つている。とにかく、この小説の筋は、同じ画熟に学んだカーロッタ・フェルとマーク・モリアーとの間に、単なる 'friends' の関係からそれ以上のものへと発展してゆくかと予想されるが、作者ロレンスは人情小説家ではないから、読者の予想通りにはその筋を展開させないで、彼女は天のじやく振りを発揮して、矢張貴族の因襲に従つて、ラスキル卿 (Lord Lathkill) と結婚する。それは大戦勃発以前のことであつたが、それから戦争になるまで、カーロッタとマーク・モリアーとは暫時相会わなかつた。戦争時代に、彼はラスキル夫妻に会う機会があつて、男同志はお互に相手の人物評価をした。偶然にも二人はダービーシャー (Derbyshire) の生れであることを発見した。このことによつてラスキル卿は、その心に衝撃を受けたようであつた。「彼が平民モリアーをじつと見詰める眼には一種の恐怖があつた」と作者は説明している。この時ラスキル卿は既に亡霊であつたとも評している。筆者は、この小説の梗概を語るつもりはない。それは兎に角、ロレンスの筋の運びによると、モリアーは、ラスキル一家とは、ほんの稀にしか会はないが、夫妻共に、その生活は次第に弱まつて行きつつあつた。

Since the war, the melancholy fixity of his eyes was more noticeable, the fear at the centre was almost monomania. She was wilting and losing her beauty. (*Ibid.*, p. 206.)

夫妻の変りようはこんな有様であつた。モリアーは終戦後英国を去つたので、彼は亦夫妻と会わないこと多年。次に帰国した時、カーロッタに通知しようか、すまいかと迷つたが、通知した為めに、彼女から来遊を望むの返事があつたので、ダービーシャーのリディングズ（Riddings）に引退しているラスキル家を訪ねて行つた。

モリアーがラスキル家へ出向いたのは月曜日であつた。停車場ではラスキル卿が迎えに出ていた。これからラスキル家で過す一日と一夜の出来事を語るのが、この小説の根幹をなすのである。しかし出来事と云つても、別に大したことではなくて、物語を進めて行く説明的な文章とか対話の文章の中に、いずれもロレンス哲学が紡ぎ出されるため、ロレンス哲学の色彩と臭味に満ちたもので、彼の文学に同情と理解を持つ読者でない限り、卒読に堪えるとは言い難い。

モリアーは、この訪問に先立つて、カーロッタを都に呼び寄せた時、お互に変つたとか変らないとかの挨拶の後、「お互に生命のある限りは生きなければなりません。あなたは、どうお思いになつて？」という女の言葉に、

'Yes. I think it. To be the living dead, that's awful.'

'Quite!' she said, with terrible finality.

といつた対話が続く。人は単に生きながらえているだけというのでは、生ける死人であつて、そんな生活は怖ろしいと云つている。しかしラスキル邸の inmatesは、いずれも生ける死人ばかりだ。そして彼等の上に君臨しているのは、Lord Rathkill の母 Lady Rathkillと呼ばれる dowager である。だからモリアーが案内されてラスキル邸に着くと、先ず伺候すべく要請されるのは、この老婦人である。'This is Mr. Morier, Mother-in-law, on his way to his room.' (Mother-in-law の Mother が大文字で始めてあるのに注意されたい）と云つて、カーロッタが、遠来の客を彼女に紹介すると、老婦人は、腰から上の身体を前方に傾けた姿勢で、五六歩前進して、彼に手を差し出した。しかし彼女がこの家で幅を利かせているのは、その年長の故ばかりではない。彼女は spiritualist（降神術者）として、自分の知つている人間の運命を支配しようとする力に依るのである。現にモリアーがここへ訪ねてくることを、彼がアフリカを旅行中に、

Lady Lathkil は霊媒を通じて知つたというのである。霊媒の語る言葉は、‘There is a man in Africa. I can only see M, a double M. He is thinking of your family. It would be good if he entered your family.’ というのであつた。(a double M とはM. M. =Mark Morier.) しかし、降神術によつて、最も大きな支配力を受けているのは、Colonel Hale である。彼は戦争前に、二十才の時、Lucy という二十八才の女と結婚した。二人の仲は至極円満で、‘I suppose she mothered me in a way.’ と、彼は二人の関係を説明している。所が、戦争が始まつて、彼がサロニカで戦争に参加している時、妻が死に、彼もその後、砲弾のために塹壕が崩れ落ち、そのために気が変になり、Lucy の幻に脅かされ、それが今日まで続いている。実は彼女と夫婦の交りを持たなかつたが、彼女は spirit としてmarry! marry! とせつくように感ずるのである。Lady Lathkill は降神術の施術者として、霊媒によつて Lucy と交信し、Colonel Hale が結婚の相手とすべき女が、どんな女であるべきかを聞き、それに合致した女として娶つたのが現在の妻である。しかるに、結婚後、彼はいつも物におびえた様子なので、新妻は彼にどこか悪いのですかと訊く位であつた。こうした調子で、ラスキル家の雰囲気は、‘the cold weight of an unliving spirit was slowly crushing all warmth and vitality out of everything’ といつた風な、「死人の家」であつた。しかし、この邸を亡霊の住家とした儘置いておくことは、作者ロレンスの本意ではない。この家の中に居ては、作者の分身であるモリアーさえも、‘I felt my life flow sinking in my body.’ と告白しなければならなかつたとは云え、夕食後のダンス会で、彼がカーロッタと踊つた時、‘One has to choose to live.’ と、彼女と踊りながら、彼女に云つたのであつた。実はこのダンス会が、この小説の中で、死と生とを別つ転機となつた。Lady Lath kill の降神術では、Colonel Hale と亡霊 Lucy との間の和解が旨く行かず、それを母から聞いて、息子のラスキル卿は、‘Awful pity we can't do anything for him. But if flesh and blood can't help him, I'm afraid I'm a dud. Suppose he did mind our dancing? Frightfully good for *us*. We've been forgetting that we're flesh and blood, Mother.’ と母親に答えている。このセリフから考え

て、ラスキル卿は、肉体的意識を取り戻し、「肉と血」以外には Colonel Hale を救う道がないことを信じ、言外に彼を spirit の世界から body の世界へ救い出そうとする意志の芽ばえが感ぜられるのである。

Colonel Hale を肉体的に覚醒させたのは、小説が語る処に依ると、Lord Lathkill であるが、彼がその役割を果すためには、彼自らが先ず自分の肉体についての意識を回復しなければならぬ。そのことは、今しがた引用したところの、彼の母に向つて、「私共は肉と血であることを忘れていました」と云つていることが、明かに示しているが、彼は夕餐の時に、モリアーと自分とを比較して、自分の肉体に気附いたのである。それに関する本文は次の如くである。

'Do you know,' he said, 'I suddenly thought at dinner-time, what corpses we all were, sitting eating our dinners. I thought it when I saw you look at those little Jerusalem artichoke things in a white sauce. Suddenly it struck me, you were alive and twinkling, and we were all bodily dead. Bodily dead, if you understand. Quite alive in other directions, but bodily dead. And whether we ate vegetarian or meat made no difference. We were bodily dead.'

肉体的に死んでいたことの自覚は、肉体の復活への第一歩である。ラスキル卿は、自分が肉体への自覚を回復すると共に、他の人々をも肉体の復活へと進ましめようと着手する。ダンス会が終つてから、ダンスをした連中（ラスキル卿、カーロッタ、モリアー、ヘイル夫人）が坐つて話をしているところへ、Colonel Hale がやつて来て、どうもからだの工合が悪いと訴える。このことがきつかけとなつて、ラスキル卿とヘイル大佐との間に談合が行われる。彼の言葉によつて、彼の病気の原因が、死んだ先妻が再び彼を憎み出したと考えている為めであることが分つた。要するに、ラスキル卿は、この談合の結果、下した結論は、

You ignored and disliked her body, and she was only a living ghost. Now she wails in the afterworld, like a still-wincing nerve.

というのであつた。それから、Colonel Hale がその悩みから解放されるまでには、しばらくの時を要するのであるが、Lady Lathkill が Colonel Hale の容子を案じて、部屋へやつて来た時、彼は哀願的な眼差で彼女を見上げながら、I never realized that it was my body which had not been good to her.' と自分の病根を自覚するに至つている。彼も到頭肉体の復活をとげる。彼も墓石を転がして墓の外へ復活したのである。

これより先、Lady Lathkill がまだ階下へ降りて来ないうちに、Lord Lathkill から、'Why don't you be kind to her poor ghost, bodily? と忠告されて、長い間うなだれて沈思黙考していたが、終に頭をあげて、化粧着の胸を開け、下に着ているピジャマの上の方のボタンを外して、彼の胸をあらわした。それは色白く清らかで、そむけている彼の顔よりも若々しく清らかであつた、というような描写があるが、彼が胸をはだけたのは、死んだ妻を肉体的に受け入れる為めのしぐさであつて、徐ろにではあるが、a gentleness of compassion came over him, moulding his elderly features with strange freshness, and softening his blue eye with a look it had never had before. Something of the tremulous gentleness of a young bridegroom had come upon him, in spite of his baldness, his silvery little moustache, the very marks of his face. という風に、彼の風貌に変化があつたことを示しているが、彼が胸をはだけるところは、妻 Lucy を死後といえども肉体的に受け容れることを象徴化或は儀式化 (ritualize) としたものである。

Lady Lathkill は、Colonel Hale の容子を案じて降りて来たが、彼女の息子 Lord Lathkill が 'We are all sitting very peacefully. There is no trouble.' と答える。それから母なる Lady Lathkill は、なおも 'She is unhappy to-night?' と尋ねる。先妻 Lucy が亡霊として現われたかをきく。彼女は Colonel Hale に大きな影響力を持つているので、彼は彼女の間に、畏縮して言葉が出ず、Lord Lathkill が答える。それによると、Our ghost is walking to-night, Mother. Haven't you felt the air of spring, and smelt the plum-blossom? Don't you feel us all

young? Our ghost is walking, to bring Lucy home. The Colonel's breast is quite extraordinary, white as plum-blossom, Mother, younger-looking than mine, and he's already taken Lucy into his bosom, in his breast, where he breathes like the wind among trees. The Colonel's breast is white and extraordinarily beautiful, Mother, I don't wonder poor Lucy yearned for it, to go home into it at last. It's like going into an orchard of plum-blossom, for a ghost. 春の気が動き、梅の花の匂がすることで、亡霊の来訪を暗示している。E・A・ポウの *Eleonora* では、彼女の死後に夫の許への訪問を約束するが、彼女の訪問を知らせる indications として、「夕風の中で、ためいきの音が聞える」、それから「天使の香炉から芳香をまき散らす」のとよく似ている。それは兎に角として、Lord Lathkill の説得によつて、Colonel Hale は、亡妻を自分のはだけた胸の肉で受け入れることによつて、Lucy を flesh and blood で愛する行為を完了して、茲に肉体の復活を遂げるのである。彼は、イエスがマリヤに Noli me tangere と云つて、触られるのを斷つたのとは違つて、象徴的ではあるが、胸をはだけて、妻の亡霊を受け入れて、妻があくがれていた夫の肉体に touch したのである。だから、彼が Lady Lathkill に述懐した言葉に、'I never realised that it was my body which had not been good to her.' といえる訳があるのである。彼女の降神術の力は失われて、'she could not get at hum.' と作者は地の文で述べている。Lord Lathkill は、その回復した肉体の力によつて、ロレンス哲学の敵である spiritualism の悪影響から Colonel Hale を解放したことによつて、彼自らも肉体の復活を遂げた生ける証拠を提供している訳であるが、それは既に外形にもあらわれていて、彼の妻 Carlotta は、夫が Colonel Hale に「男の肉体が女の肉体に対して good であれと忠告している姿を見詰めていた時、夫が別人になつていることに気附き、自分も又 a new delicately-wild Carlotta になり得ることを信じたのである。

文明批評家としてのロレンスは、現代をもつて so cerebral であるから、we are humanly out of touch だという。だから Noli me tangere と云つて人間としての接触を回避しようとする。こういう弊風を打破して、肉体の復活を計つ

て、我々が人間として接触関係に入ることを恐れないようにしなければならぬ。Noli me tangere とは、cerebral human beings の陣営の shiboleth である。

（一九五六・三・一六）